

## 〈第三世界〉に絡めて

室 井 義 雄

経済学部で発展途上国経済論を担当しております室井です。研究会担当の先生から、今度の追悼集会で何か喋ってみたいかと誘われた時、私の様な者に話す機会を与えて戴き本当にうれしく思いました。これが正直な気持でした。

でも、果たして何か喋れるのだろうか——、うれしいと同時にちょっと困ったな、と思ったのが本音でした。と言うのは、先生とはあまりにも短い接触しかできなくて、玉城先生とは一体何者だったのだろうか、いくら考えてもよく分らない、未だによく分らないのです。

本当に何を喋っていいのか——、短い時間内で先生の思想を私なりに噛み砕いて消化して報告することはとても出来ない、という事が夕べあたりようやく気づきまして、そこで今日は、私なりの思い出話みたいなもので責任を果たさせて戴きたいと思います。

\* \* \*

ある先生から、玉城先生が亡くなられた事を電話で聞いた時、私は最初に「しまった」、「ものすごく、しまった」と思いました。どういうことかと言いますと、先生ともっとお酒を飲んで置くべきだった——、そういう気が先ずしたのです。つまり、玉城先生との短い接触を通じて私が感じたのは、先生は活字を通して理解できる人ではない、という事でした。絶対に酒を入れて、何かこう、膝を交えて議論して行くうちに、先生が過去に何を考え何をなされ、そして今後どうされるのかが分るようになるものと思っていました。先生の「生き様」とは一体何なのだろうか——、それを酒の席で直接お聞きしたかったのです。今まで何回も機会があったのに、もっと顔を出すべきだった、「しまったなあ」というのが私の最初の印象でした。

私は本学に職を得てまだ三年目にすぎませんが、この間、玉城先生の隣りに座り面と向ってお酒を飲んだのは二回程記憶しています。このわずか二回ですけれど、非常に強烈な印象が残っています。

一回目の時はこうでした。玉城先生とある方の議論中に、その相手の方が「自分は職人の気持ちが分る」というニュアンスの事を言われました。すると突然、玉城先生が「ふざけるんじゃないよ」と大声で怒鳴られたのが非常に印象的でした。先生に言わせれば、「職人」の気持ちがそう簡単に分ってたまるか、素人が何を言うか、そういう怒りだったと思うのですが、その時私は、玉城先生は恐ろしい方だと深刻に考えた事を記憶しています。

二回目の時は、大変生意気にも私の方から絡んで行きました。玉城先生がある雑誌で「私は水職人だ」と述べておられたので、その所以を聞いてみたかったのです。「水の専門家」なら私もどういう事もなかったのですが、「水職人」という言い方はどうしても気になったのです。つまり、「職人」というのは、恐らくカンナとか物指しとか、そういう〈道具〉を持っているはずだ。とすれば、「水職人」を自称される先生の〈道具〉は一体何なのだろうか——、と妙に絡んでいったのです。

しかし今になって思えば、実はつい最近『水紀行』（日本経済新聞社、1981年）という先生の本を拝読したのですが——私はこの本が一番好きですが——、やはり先生は何か〈道具〉をいつも懐に入れて各地を歩き回っていたのかもしれない。あの時には大変失礼な言い方をしてしまった、と反省しています。それでも、先生が大事にされていた〈道具〉とはカンナだったのか、物指しだったのか。それともトンカチだったのか、未だによく分らないのです。

それから同じ酒の席で、私はつい「お子さんは」と聞いてしまいました。「いや、いないよ」と言われて、私は非常に驚いた事を覚えています。先生はどうしてそんなに驚くのだと不思議な顔をされていましたが、私にはとても意外でした。

つまり、うまく説明できませんが、家庭＝家族が様々な社会組織の中で最小の単位であることは間違いないと思います。先生もある箇所で「家族は一種の共同体である」と述べられていますが、そうした家庭＝共同体に子供がいないのは、私にとってはどうしても具合が悪い。つまり、私は極めて独断的に「家庭／家族＝夫婦＋子供＋α」と定義していましたが、「子供」という構成要素を欠く先生が、にもかかわらず、むしろ逆に、「共同体」について非常に鋭い眼を持っておられるのは何故だろう——、そういう意味で驚いたのかも知れません。

また先生は他の箇所で、「市民社会もまた、共同体的な人間関係を完全に克服できなかった」と述べておられます。K・ポランニー流に言えば、〈市場原理〉と〈非市場原理〉との相克という事になると思いますが、私はそうした相克の最も身近かな〈現場〉が家庭ではないかと考えていましたし、あるいは当時の私自身、子供（と、その母）に振り回されていたせいかも知れません。ともかく、今でも説明がつかないのですが、先生に子供がいないというのは、私にとっては何故か意外でした。

私が玉城先生と初めて個人的にお話したのは、本学に入職してからだいぶ経ってからのことです。もちろん、それ以前からも先生の存在は私なりに意識していましたが、『国家論研究』の創刊号（1972年）に先生が「土地所有と国家」という論文を書かれておられたので——実は、この雑誌を買い求めたのは、本当は岩田弘氏の対談が目当てだったのですが——、お名前だけは学生時代から存知上げておりました。でも、講義の準備等で忙しかった事もあり、私の方か

ら先生に近づく事はありませんでした。

最初の機会は電話を通じてでした。私が二部で担当していた経済学基礎演習の学生が、授業料未納で退学させられそうになったのです。そこで、当時二部の学生部のお仕事をされていた玉城先生に「何とかならないでしょうか」と電話で相談した所、「金払わなきゃ仕様がな、それは本人の責任だよ」というニュアンスで言われて、確かにその通りなのですが、意外に冷たいなという印象をその時は受けました。実はそのすぐ後に、先程の「私は水職人だ」という論文を読んだので、なおさら気になったのかも知れません。

ところが、それからしばらくして、突然、『日本の社会システム』（農山漁村文化協会、1982年）という本を送って戴き、私は本当に驚きました。私は全くの門外漢ですし、先生のお教えを受けた経験もないし、偶然に同じ大学に職を得る事が出来たものの、それ程親しくして戴いていた訳でもなかったからです。それから、一方的でしたけれど、何回か手紙を差し上げ、私なりの風呂敷を広げていました。でも、先生は忙しい方でしたから、ついに一度も自筆の御返事は戴けませんでした。

そうしているうちに、今度は『専修ニュース』という学内新聞の「ゼミ紹介」欄で、玉城ゼミが経済人類学をやっている記事をバスの中で偶然に読みまして、それからまた先生への想いも変わったようです。私自身、経済人類学には強い関心がありましたし、その時には、先生は何故に経済人類学に興味を持たれたのだろうか、その動機がまず知りたいと思いました。

これも、ある酒の席での話ですが、経済人類学の話題になった時に、先生が冗談に「じゃ、来年あたりジョイントで講義やろうか」とおっしゃいました。私は非常に驚きまして、全然自信がなかったものですから、「いやちょっと待って下さい、五年待って下さい」と言うと、先生は「五年も待てないよ」と言われました。確かに、冗談だったかも知れませんが、でも少なくとも可能性としては、いつか先生とジョイントで講義やゼミが出来たはずなのに、その可能性さえも消えてしまい、本当に残念です。

先生のゼミが解体して、ゼミ生が三人私の所に入って来たのですが、それぞれとてもユニークな学生です。彼等が私の所に来た理由は単純で、私が後期の特殊講義で経済人類学をやるとつい口をすべらせてしまったからですが、その意味でも、因縁と言うと大げさですが、そんな感じがしています。

結局の所、玉城先生が過去にやられて来た事、あるいはこれからやられようとした事は何だったのだろうか、それと私自身が今抱えている仕事なり、思想なり、生き様とどう関わり合うのだろうか、という事に話は尽きる訳ですが、その答えは簡単には出て来そうもありません。先程申しましたように、玉城先生というのは決して活字で読む対象ではなくて、大変失礼な形

容をあえてさせて戴きますと、ライオンみたいな顔というのか、非常にしわが深くて、ニコニコとものすごく優しい顔をされていて——もちろん、眼を見ますと、ちょっと恐ろしいのですが——、あのお顔を目の前にして、あの迫力に圧倒されながら理解すべき方だと今でも私は思っていますから、活字で後から追いかけて行くというのは、私にとっては大変辛い課題になってしまいました。

\*                     \*

今日の私の課題は「第三世界に絡めて」という事ではありますが、残された時間内で、日頃感じていることを思うままに述べさせて戴きたいと思います。

「第三世界」というと、すぐに「ナショナル・エコノミー」のレベルで、つまりアジアのある「国」とか、アフリカのある「国」とか、そういうレベルで議論される方が非常に多い訳ですけれど、私自身は決してそうとは考えていません。これは、ある意味では、A・G・フランクに学んだ事なのですが、中心部（MC）／周辺部（SP）両極化構造が、地球大規模のみならず一国内部にも貫徹するとすれば——それ自体は非常に単純な発想ですが——、我々が住んでいる日本の内部にも当然＜第三世界＞が存在するはずで

こうした視座から、つまり、「ナショナル・エコノミー」という分析枠組を取り払った所から＜第三世界＞というものを考えて行くとすれば、玉城先生が何故あれだけ農村、すなわち都市ではない部分に目を向けられていたのかが把握ののかも知れません。先生が言われる＜農村＞と、私が定義する＜第三世界＞が何処かで通底しているような気がするのです。

＜近代＞と＜非近代＞——後者は「前近代」と決して同義ではありませんが——、この両者の相克、しがらみを、先生は農村を回る事によって肌で感じて来られた方だろうと思います。この点、御承知のように、K・ポランニーの『大転換』（吉沢英成・他訳、東洋経済新報社）の邦訳が1975年に出版されています。ところが先生の論文の中にも、1975年にK・ポランニーが出て来る。もちろん、それ以前に既に原文で読まれていたのかも知れませんが、これが初出かどうか確認していませんが、とにかく、K・ポランニーが翻訳されたその年に先生もご自分の論文で引用されている。つまり、K・ポランニーの問題提起は、玉城先生にとっても相当にショックだったのではないかと想像される訳です。先生ご自身、K・ポランニーの著書の中では、この『大転換』が一番面白いとある時述べていました。

K・ポランニーはこの本の中で——他の著書においてもそうですが——、人類普遍の社会とは決して＜市場社会＞ではなく、むしろ＜非市場社会＞であることを繰り返し強調しています。この辺が、玉城先生の問題意識と恐らく重なっていたのだろうと思います。

この＜市場社会＞と＜非市場社会＞、あるいは＜近代＞と＜非近代＞との相克というテーマ

は、実は私自身の研究テーマとも重なって来ます。現在の私は、ある意味ではたまたま、西アフリカのある国の事を研究していますが、先程の概念規定に引き寄せれば、将来的には当然、日本における様々な〈周辺化された部分〉をも分析の射程内に入れざるを得ません。その糸口の一つを、玉城先生のお仕事の中に見い出せるような気がしています。

K・ポランニーについては、今本を読みながら講義を進めている段階で全く整理していませんが、彼の言葉で言えば、「経済」の本義を問い直す、という事に繋がるのかも知れません。私が持っている小さな辞書を見ても、`Economy`には多様な意味があります。よく使われるのは、`national economy`とか`international economy`とかいう時の、社会や国家の「経済活動・状態」の意味です。もう一つは、よく高校の入試あたりで出て来る`man of economy`や`economy of words`で、この場合には「節約」とか「稀少性」という意味がある。

さらに、`organized system or method`、つまり「有機的に組織化されたシステムあるいは方法」という意味があります。例えば、`the economy of nature`は「自然の理法」、`the body economy`は「肉体の統一的調節」、また`the economy of the plant`は「植物の有機的営み」と各々訳しますが、こうした`Economy`の概念は、先程の`national economy`や`man of economy`のそれとは明らかに異なっています。

それから、私は素人でよく分かりませんが、神学のレベルでは「摂理、定制、経倫」の意味として、つまり「創造から贖罪を通して究極の幸福を人間に導く聖なる神の計画」、あるいは「特定の時代または民族に対する神の支配」という意味で使われるそうです。最後に、「家政」つまり`management of household affairs`の意味もあります。

もちろん、こうした`Economy`の多義性については改めて言うまでもないことかも知れませんが、実は私はこれをK・ポランニーから初めて学び、非常に新鮮な印象を受けました。K・ポランニー自身は`organize system or method`の意味内容で使用していますが——もちろん、これはむしろK・マルクスの元来の発想だったと思いますが——、悪しき経済(学)主義に陥っていた私にとっては、〈第三世界〉／〈非ヨーロッパ世界〉／〈非近代〉を考える上で大きなヒントになっています。恐らく、玉城先生もこの辺に気づいておられたのではないかと、私は思っています。

これまた酒の席で、大変失礼にも、「先生の本を一冊読むとすれば、何を読んだらいいのですか」とお聞きした事があります。すると先生は即座に「風土だよ」とおっしゃいました。それが『風土』(平凡社、1974年)なのか、それとも『風土の経済学』(新評論、1976年)なのか聞き返しませんでしたが、私はむしろ先程挙げた『水紀行』が一番気に入っています。先生ご自身も本音を書いていると述べられていますが、その中で、ある美術評論家のエッセイの次

のような一節を引用しています。

「大体、水の魔力は、その把えようのない任意性、とでもいうほかのないところにあるのだ。たとえば、水はどんな形態も装うことができると同時に、自らの固有の定形を一切もたない——その矛盾した多義性、おそるべき曖昧さの前で、ちゃちなイメージも生半可な歴史的感概もふっとんでしまうのである」

つまり、「水」の持つその恐るべき曖昧性・多義性に、玉城先生が「水」というものに引かれた理由があるのでは私は思っています。その少し後に、先生自身、「私の方にも相当の曖昧さがあるから水に引かれた」と述べておられますが、それはともかく、私は、玉城先生の「水の思想」というのはこうした点に尽きると思っています。

そうした多義性、把えようのない恐ろしい曖昧さが社会の現実とすれば、私自身、これからもそれに立ち向って行かざるを得ないのですが、本当にもっともっと教えて戴きたかった。もちろん、玉城先生に言わせれば、「そんな事はご自分でやりなさいよ」という事になるのでしょうが、それにしても、私にとっては余りにも短い時間でしたので、残念だったなあ、とそんな気がして仕方がありません。

思い出話にもなりませんでしたが、時間がきたようですので、この辺で終わらせて戴きます。

#### 〔付記〕

玉城先生には大変失礼な言い方が多々残った。しかし、これは私自身のメモリーでもあるので、あえて録音テープの大幅な修正は加えなかった。失礼をお詫びすると同時に、ご冥福をお祈りします。

1984年1月16日